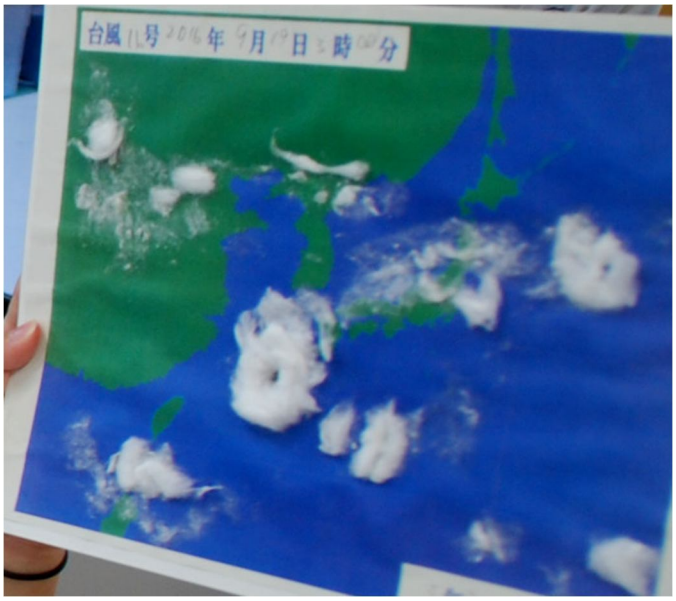
「日々の理科」（第 834 号） 2016（H28）,10,18

「台風 16 号の模型（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

この活動は、台風の立体的な形状や動きを実感することが目的である。従って、一番丁寧に作らなければいけないのは台風本体の雲である。

そのことは子どもたちもよくわかっていて、やはり、台風本体部分の雲を、ピンセットも使って、時間をかけて丁寧に仕上げている子どもが多かった。



台風雲の立体表現で一番難しいのが、目の表現と、周囲の腕雲の形状である。この子どもの作品は、目はよく表現されている。雲画像と比較しても、台風中心の地理的な位置もほぼ正しい。最初に台風のおおまかな形を作っておいて、その後目の部分を楊枝であけるという手順で成功させていた。しかし、腕の雲と、台風周辺の雲が、まだ完成していないようだ。

台風本体の雲よりも、実は台風から延びる秋雨前線の雲や、中国大陸のジェット気流の薄い雲の表現のほうが難しい。これは、脱脂綿をあえて「裂ける方向と直角に」引きちぎって、その時毛羽立った綿を使うとうまくいく。

この方法は、台風周縁部の高層のうす雲（擬巻雲）にも使える。作業に慣れてくると、実に器用に、どんな形状の雲も、立体的に表現できるようになる。この活動の難点は、のりの消費が著しいことだ。本当に丁寧に作業すると、１枚の作品を仕上げるのに、小型のスティックのりを、丸ごと１本使い切ってしまう。

できあがった作品を互いに見合う「台風博覧会」を開催した。実際の台風は、地球の球面にへばりついている。少しでもその実感を得るために、台紙を山なりにそらして、「宇宙からの視線」で見ている。こうすると、台風の立体感や、水平線から近づいてくる様子が実感できる。楽しい活動だった。